

と僕が曰へば「君もだらう」と彼は曰ふ。

待ちつ暫時語つてゐると、ウイルシャイアー君が戸を排してはいつて來た。で吾れらは彼に従ふて昇降機にのつて、七階目か六階目かの床にて降り、直ぐさまゴルギアの室にと導びかれた。

然るに何ぞや、驚かざるを得ないではないか。彼の室は已に客を以て充ちてゐた、否な會見の人が丁度芝居のいり口に戸の開くのを待つてゐると同じく、ゾロツと一列に立連んで、ゴルキアは先づ一人宛接見してゆくのであつた。自分等も列について順々に彼の前に近づくより他なかつたのである。

ウイルシャイアー君は予が彼の前に近づくを見るや、即ち予の手をとつてゴルキアの手に渡して曰く「予は日本の一同志金子君を君に紹介するの榮を持つ、日本と露國とはこゝに一致せられねばならぬ」とゴルキアは予をぢつと見守つて、予の手の痛いほど強く固く握つた。

悲しいことには、予は露語を解せないのである。ゴルキアは英語を知らないのではあ

る。で予は固く握ぎられた手を一層固く握りかへして、英語で「予は唯だに文人としてのみでなく、吾等が同志として、平生その風采に接したいと思ふてゐた人を目前に今見得たとを喜ぶ」と曰ふて、傍に起つていた一露婦人の通譯者にその通譯を乞ふた。

ゴルキアは予の言を解するや否や更らに通譯者に通じて、自分は日本人に逢ふたことは二三回あるが、君との會見の如く、眞の友情と同情とに充されて逢ふのはこれがはじめである」と曰ふた。

予等は更らに露國の一女優にして、ゴルキア崇拜者たる、ゴルキア夫人に紹介せられた。夫人はゴルキアにくらぶれば小形で、然し頗るアトラクテイヴな婦人である。夫人は佛語で予に佛語を語るやと、尋ねたが、予は少しばかりの外、語り得ぬとおぼつかない予の佛語で答へたら、彼女は非常にうれしげに、なほ語をついで、米國で日本の友人に逢ふのは意外である。意外である。と両手を以て予の手を握つた。

ゴルキアはトルストイと等しく、長い百姓の着物をきて身邊少しも飾る所なく、自然のまゝで、その丈高い大きな身體、あたくい同情にあふれたやさしい眼、一度彼



に接した者はそのなつかしい面影を忘れることが出来ないと思ふ。

一通りゴルキーの紹介が終つて了つた時、彼等十數名の客人は又互に客人同志の紹介が済んだ。余は再び驚ざるを得なかつた。何となればこの日此一室に集つた者は、何れも當代北米の文壇で聲名を博しつゝある知名の文士であつたので。そのうち予が初めて知を得たものは、「スタンダアード石油會社史」を書いて名をなせし、アイダ、タアベル女史、キャナタ産の詩人ブリス、カアマン君、社會主義的詩人として「鐵をもてる人」なる名詩の著者たるエドウィン、マークハム君、等である。

マークハム君はもはや白髮の老翁で、予が自らを紹介して「予は日本人であるが君の詩は平生予の最も愛好する所で、何時か一度君に面會して、それを語りたと思ふてゐた」と曰ふと、彼は満面喜色を帯て「それは何よりうれしい、予にも一人の日本人の知人がある、今は日本で教師をしてゐる。君もし暇あらば予が家を訪づれたまへ、ゆつくり語りあはふ」と答へた。

ゴルキーがマークハムと通譯者を遣じて、御互にヒュマニテイのため一身を獻ぐ

るの快を語り、マークハムは露國の不幸なる人民のため同情の涙禁じ能はずと曰ふてゴルキーの手をにぎれば、ゴルキーの眼には涙にわかにあふれ、彼は人前をもかまはず、ポケットより、ハンカチーフを出してハナをすゝつた。

予は直ぐ傍に起つてゐたので、ゴルキーの如何にも自然なる、感じ易き性情を観察することが出来た、ゴルキーの左手はマークハムの肩にかゝり、マークハムの手はゴルキーのそれと固く握られて、實に一種曰ふべからざる光景であつたのである。

マークハムの外に最もゴルキーの注目をひいた者は、確に日本人たる自分であつた、ゴルキーは幾度か予の前には、日本が露國政府を打つてくれたことは、予の感謝する所である、日本及露國の同胞が不幸の死を遂げたのは、悲しいが、露國革命黨が受けた利益は、決して少々でない、予は東郷の勇を賞してやまぬ、予等革命黨は彼に謝さねばならぬ、と曰ひながら自分の室より一佛語雜誌をとり來り、予に示して曰ふやふ「見賜へ！こゝに東郷の銅像がある、銅像の前につてゐる大きな男……この男は帽子をとつて敬體を表してゐるのです、而してこの男は吾等露國革命黨なの



だ。

予は同雑誌を手にしてみたら、これは露國革命黨がスウィツランドで發行してゐる一雑誌であつた、予は此事實よりみて、露國革命の志士等が勢ひ武力に訴ふるの止むなき者あるをみる事が出来ると思ふ、これについて面白い實話がある、一米國人であつた、曾て一露國革命の士に逢ふた時、君等は何故武力を用ゆるかと問ふと露人は曰く「君等は言論、言論ツて曰ふが言論の武器が用ひられぬ露國で言論が何の用ぢ、君は言論を用ひられずば、即ち黙してやむか」、米人曰く「否な予は武器の人たらむ」と露人即ち手を打つて笑つて曰ふらく「予は武器の人たるまでには、少なくとも十数年の辛苦と戦ひとを経てなりしなり、然るに君は今、分時にして武器の人たるべしと曰ふ、予は君の果斷を賞す」と。

ゴルキーが東郷を賞し、その勞を感謝する所以も、この實話に依りて理解せらるゝと思ふ、ゴルキーも涙の人なり、ヒュマニテイーの士也、豈に自ら好むで暴力を用ゆるの愚をなさんや、而も露國の現状が實に彼等革命黨をして、しかく感せしむるのであ

る、予はゴルキーに同情するの至當なるを信じてゐる。

予が日本にもゴルキーの名の知られてゐて、青年文士に尊敬せられつゝあること、彼の小説の數種が翻譯されてあることを語り、一例として「新公論」のゴルキーの寫眞を載せたる者を彼に與ふとて予が示せば、彼は小兒の如くうち喜びて「予に關する記事もありますか」と尋ねた。予は即ち「ゴルキーは露國のゴルキーにあらず、世界のゴルキーなり」てふ文句を譯してみせたらば、彼れは直に通譯者をして雑誌に記入せしめたのである、予はこの日本の一雑誌「新公論」が今後ゴルキー君に依りて深く秘藏せられ、記憶せらるべきを信じて疑はぬ。

マークハム君は予の妻に語りて曰く「ゴルキーはエレメンタル、マンなり、自然のまゝの人也、修飾なく、虚儀なく、偽善なく、虚名の念なく、一言にして曰はば眞個のデモクラチックなる人也」と予はこの評の最も的れるを信ずる、今日ゴルキーを見るべく來た人のうちでかくも能く彼の人格を言ひ現はし得しは、流石米國第一流の詩人マークハムであつたのだ。「ゴルキーはエレメンタル、マンなり」と。



予は餘り多くの客人にとりまかれつゝあるゴルキーの寫真をとることが出来なかつたが、この目的のため他日の再會を約して別れた、ゴルキーは露人である、而も予は眞に自分の兄弟に會せし如き思ひに打れた、そのやさしき面影、同情ある言辭、熱血ある舉動!! 嗚呼、予は日本人たること、露人たること、を全く忘れて握手し得たことを喜ぶ。

西サンフランシスコには國家のためを思ふて却つて牢獄に投せられ、その健康を破りし吾が未見にして而も親愛の幸徳傳次郎君、この東には等しく同胞のため牢獄に苦み、漸く急をのがれてこの亞米利加にいらり來りしマキシムゴルキー君、予は日本と露國と、友人と知人と、人民と人民とを思ひ來りて、實に感慨の念に耐へない、世にはかの徒らに虚名を追ふて、果敢なき榮華にふけるもの、自己の限りある能力、天才にはこるもの、……彼等にしてもし眞に人民のためを思ひ、心よりヒュマニテイーのため盡しつゝある士に接せば、必ずや自個の人物の極めて少なるに耻ぢねばならぬと思ふ、予はゴルキーに接して、汚れざる、汚されざる眞の獻身的精神に満てる人格を見

出し得たのである、ゴルキーは尋常の文士にあらず、小説家にあらざる也。

身を最もいやしきトランプに起し、今や露國文壇の花、社會革命の勇將たるゴルキーは、所詮筆のため筆を弄するの文士ではない、藝術のためペンを持つ小説家でもない、ゴルキーは革命家である、眞個のデモグラツト、黨派臭味なき社會主義者、ヒューマニタリアン! 予は曰ふゴルキーは世界の戰士なりと。

### 酷遇されたるゴルキー

(社會の制裁とは何ぞや)

マキシム、ゴルキーが一家の私事のため、曰ふのは前妻との結婚が寧ろ不幸の結婚で、今の一女優たりし婦人を妻とするに當り、先妻との關係を全く絶つ能はずして今日に至り、而して彼がこの米國に來るや、淺薄にしてさわざ易き國民は直に口を揃へて、ゴルキーの不道德を責め、ホテルはその止宿を拒絶し、市民はその交通を断絶して了つた、勿論このホテルの主人と曰ひ市民と曰ふも、所謂紳士閥のそれらで、自ら



稱して徳行家となす所の偽善家連である。勿論ゴルキーの場合は甚だデリケートな場合で、一概に總括して論評することは出来ぬと思ふ。一露國通の曰ふ所に従へば、元來露西亞に於ては離婚は極めて面倒なるもので、舊教徒以外の人が離婚を承認するには、少なからぬ手数を要すること、時としては、全く離婚は不可能であるとのことである。ゴルキーは勿論、後妻と生活を共にするに至りし前、離婚の許可を試みたのであるが、思ふ如く事はこばなんだのだ。

亞米利加人がゴルキーを遇するの態度をみて、輕薄なる偽善家は揚言して曰く「流石は公德の發達している米國である、ゴルキーの天才を以てしても終に彼が私生涯の汚點は許さうとしない」と。なるほど一寸見れば至極尤もらしい言ではあるが、その實少しの根底もない。抑も公德であり、社會制裁であり、世人の想像するが如く、數學的に働くものではない、ゴルキーが米人に依りて取扱はれた事例は、時流道德から見て、よしんば、公平であるとしても、米國の社會制裁は公平ではない。

今日、米國に於ける富豪紳士社會の不道德と曰ふものは、それは記述に堪へぬ者のみである、只だに重婚のみにあらざる也、三重婚あり、四重婚あり、姦通あり、公然の密婦密夫あり、而して社會の制裁は何所にありや、宗教の威嚴は何所にありや、公德とは何を指して曰ふものなりや、實にチャンプンカンである、而して唯だ一人のゴルキーは一憐むべき外客としてのゴルキーは、不徳にもあらぬ、神聖の愛よりして、止むを得ざる離婚の不幸をみて、新たな夫婦の關係を作りしのみであるにも係はらず、公言して重婚の不徳義を難じ、破公德を以て彼を目するの米國民は、抑も何等の偽善者なるぞ。

ゴルキーの場合は恰もリツチャード、ワグナー、シエリー、ジョーヂ、イリオット、ジョン、スチワード、ミル、デヨーヂ、サン等の場合の如く、世にも不幸なる場合である、ゴルキーの先妻はゴルキーの理想を了せざるのみならず、寧ろゴルキーの政治思想に反對して、所詮彼をして奮闘の生涯を送らしむることを拒むたのである。で彼は米人の待遇甚しく酷なるをみて絶叫して曰ふた、「予は予獨り起つ時最も強し」と、



眞に彼の心事を推すべきであるまいか。

兎もかくゴルキーの先妻はゴルキーと分れて他に嫁し、ゴルキーも又、彼を充分了解し寧ろ崇拜しているほどの一女優アンドレーメアと婚したのである。凡そ世界の天才とも曰はるる人物の生涯を見れば、何れもこの悲劇に逢遇している。勿論ゲーテ、バイロン、伊藤博文、下田歌子の場合の如きは、全くコンツェンショナル道徳を離れ、許すべからざる不徳漢である、吾人は天才の名のもとに、若しくは彼等があげ得たる事功の名のもとに、その不徳義を許容し去ることの餘りに寛大なるを信せんとする者である。

而もワグナーの如き場合、シエリー、イリオット、ゴルキーの如き場合は、決して不潔なる女娼家伊藤博文の場合と比較し得るものでない。……序でながら曰ふて置く、野口米次郎は米國の一雑誌ナショナル、マガジンに、近日伊藤博文を辯護して曰く「伊藤侯は婦人に對して最も忠實なる人物也」と、予はこの一節をみて、實に野口は日本の女性を侮辱したるものと思ふ、予は世間徒らに自己の虚名を賣らんとして妄りに權

門に媚び、勢家に阿ねるの俗輩多く、而して又その俗輩の人物の眞偽を見わくるの明なくして、所謂時流に従ふて、社會道徳であるの、人才であるの、德行であるのと喋々する愚物をあはれむものである。世に最もあはれむべきものは「考へのない衆愚」、  
「腦のない動物」である。

アメリカの社會がゴルキーに無暗矢鏢に喰つてかゝつたのは、矢張考へのない、頭のない新聞記者の俗論にかされたからである、シカゴの一商人マーシャルフヒールドの死んだ時も米國新聞は口を揃へて、マーシャルフヒールドは模範的商人であるの、人民を苦しめないで作つた財産は、マーシャルフヒールドのそれであるのと喋々した、而も彼等は眞理を語つては居ない、彼等は自ら考へないで、一犬虚に吠へて万犬これに従ふたものである。

極めて冷靜にかゝる問題を考へてみれば、世の中の道徳とか、不徳とか、曰ふものは、明白に分つてくる、社會制裁は常に常識の土臺の上に起つては居ぬと曰ふことも分つてくる、善く個人と個人、それから社界との關係を見分けてくれば、この混雜してい



るやうな社會倫理も、明々白々の問題となつて了ふ。只だ世の俗輩……自ら考へない俗輩は、つまらない、意味のない信條とか、道徳とかを標準として考へるから、誤解が生じてくるのである、事實を取りのぞけて考へたとて公平な結論は得られるものでない、紛々たるゴルキーの批評も、事實の上から觀察を下さぬからの、誤りであると思ふ。

社會制裁と曰ふものは他くまで數學的に動きはせぬ、見られよ日本に於ける故福地源一郎、今の徳富猪一郎は如何、彼等は社會制裁の極めて弱い國と自稱する日本で、社會的最後をとげた人物である、英國に於てもパーネルは女性間の不評判より社會的自殺をせねばならぬ間に、ジョーヤ、エリオットは文士として、ともかく非常なる責罰なしに一生を過し得たではないか。

然り、社會制裁なるものは不紀律に而して不公平に働く者はない、この極めて盲目にして、非數學的なる社會制裁を取り來りて、甲の社會は公徳が進むでいるの、乙の社會は社會制裁力が弱いのと曰ふは實にとりよめなき評論である。ゴルキーの場合

を以て米國社會の公徳……紳士道徳が……進歩しているをみた人は、現時の富豪紳士間の不道徳を制裁するの社會制裁力を何所に見たりや、予は眞に知りたく思ふのである。

社會制裁は一種の義勇軍のやふなもので、兵法も知らず、規律もわきまへず、地理も察せず、盲目矢鏢にうつてかゝる輩である、あるひはゴルキーに的り、あるひはパーネルに的り、あるひは徳富猪一郎に的り、あるひは福地源一郎に的ると雖も彼等はエリオットを見殘し、ワグナーを見殘し、ゲーテを見殘し、而して更らに甚しきに至りてはロックフェラーを見殘し、公然イリー鐵道會社を通じて盜賊の行爲を敢てせしぜ、グールドを見殘し、伊藤博文を見殘し、下田歌子を見殘して居るではないか。

予は世間謂ふ所の公徳なるものや、社會制裁なるもの、頗る要領を得ぬものであることを感ぜざるを得ぬ、予は一人のゴルキーを辯護するのではない、唯だ世間徒らに漠然として、社會制裁を喋々するの徒に向つて少しく考へて貰ひたいのだ。殊に卑近なる米國の社會道徳を稱揚するの徒に再考を要求するのだ。



佛國の一記者ガスターブ、カーアーンは論じて曰へらく、「米國に於けるこの似而非道徳は必竟婦人跋扈の結果のみ、米國婦人は自己が不徳を働きながらも、なほ新聞雜誌の批評の自己が上にあらざらんことを要求す、……惟ふにゴルキーを歓迎しつゝある彼等は、ゴルキーの著述の一頁をも讀まざるの徒ならむ、ゴルキーは唯だに所謂現時の結婚なるものを罵倒するのみならず、彼は自由戀愛を公然主張するの革命家也」と。

社會制裁の人に於けるは、文典の文章家に於けるやうな者である、餘りに文典に拘泥すれば眞の文章は死んでしまふ、活きた文章を文典律で批評すれば、文の妙味は分らなくなつてしまふ、社會制裁は盲目なもの、文典は規則立つたもの、文章は活きたもの、人間は進歩してゆくもの。

### シカゴ社會黨日刊新聞發行者物語

シカゴ社會主義者が初て日刊新聞の計畫を立たしたのは、勿論永久刊行のものとしてではなく、唯だ十一月七日の選挙に際して、選挙日前二週間を豫期したのであつた、而

して編輯主任としては富豪社會主義者として、且はトリビュートの青年記者として、名を知られたる、メデイル、バタアン君が其責に當ることになり、サイモンズ夫婦も記者として助力する約であつた、

僕はシカゴではまだ新參者である、尤も丁度十月の初旬に新英州から移轉したので日刊社會主義新聞の第一號がまだ顔出せぬ時、己に予はシカゴに在つたのだ、嘗てより名は聞て居り、交通も一二回したともある、サイモンズ君に初て逢たのも「週刊ソシヤリスト」誌であつた、

二週間のつもりで創めたのであるから、無論一時の間に合せ主義を採り、配達法なり、編輯法なり、總て一時的にやり、紙面の記事の如きも多くは發行前に悉く出來てゐて、唯だ日々の新聞雜報を待つのみであつた、然るに十月廿五日は間もなく到着し初て英語を以て書かれたる最初の吾黨日刊が世界に顔出するとなつた、出て見れば流石は念を入れて遣たもので、逆もシカゴ市で發行しつゝある資本家新聞と比して、紙數こそ少ないが、實質に於ては敢て劣る所はなかつた、



選挙日は近寄つた、二週間を生命の吾黨新聞も愈々その最後の日に近かんとして来た時分、日々百千の書簡は米國の各地より來り、日刊永續の勸告を爲すのであつた、二週間豫定の新聞委員も一時躊躇うた、永續しようか、豫定通りに止めて了はふかと、是は亦無理でもない、何となれば委員は一文なしであつた、夫から愈々明後日はと云ふ日になつて、委員諸君は相談會を開てみた、所が委員の多数は「兎も角遣て見よう」と曰ふ方の側のみで、一面には多數讀者の勸告を資本となし、他面に於ては諸方の有志より資本募集と出掛けるにした、而して例のバターソン、プレツコン、ステッドマン、サイモンズ等の委員は先づ各々出來得る丈の出金をして「勞働者出版協會」てふ組合を組織したのである、

組合の株金は十弗一口と曰ふにして、何人でも買ふとが出来るやうになし、廣く讀者の間に募つた、所が天運の導く所、行く所として良からざるはなく、立所に一時を凌ぎ得る丈の資金は出來たのである、そこで公然日刊永續の告白をなし、愈々天下晴ての「日刊シカゴソシヤリスト」となつたのが去十一月八日の發行からである、

愈々永續刊行となつてみれば、間に合せ主義で遣て來た社員ではいけない、日刊新聞に充分経験のある人物を雇入ねばならぬと曰ふので、直様當時一流の資本家新聞なるトリビューン社から、二人の経験家を雇ひ入れた、夫れは即ち編輯長と發行部長とである、然るに間に合せ主義で遣り始めた新聞であるから、追の経験家も眼玉を抜かるゝ程忙しい、忙しいのみではない、不整頓は到る所に道を塞で了つて、讀者からは苦情が來る、曰く「己の家には新聞が一枚も届かぬ」「己は代價は先拂して肝心の新聞には一度もお目にかゝらぬ」と、

到頭一週間でドリビューンよりの發行部長先生も弱て了つて、辭職と曰ふことになつたのである、恰も此時分僕も好意づくで、時々社に往ては一寸したものを書たり、事務を手傳つたり、四方からの手紙に返辭をしたり、電話係を勤めたりして居たのでポランティヤールとなつたのである、然るに十一月の十日頃となつて、一日事務長プレツコン君の曰ふには「君も社員となつて今後一切の事務を助力して呉ては如何」と曰ふ相談に預つた、予は自らの好む所であり、同主義者であり、素より拒む可もあらず、



快諾したのである、

差當、僕はトリビューンよりの發行部長退去に付て、最も困難を極めつゝあるサーキユレーション部に飛込だ、イヤハヤ所が予はシカゴ市の地理に通せざると、恰も外國人の如くで、毎日朝から夕迄で地圖と首ツ引と曰ふ始末であつた、一週間やつたら、漸く地理にも通じ、苦痛も幾等か薄らいたが、朝九時から夕の七八時頃迄一時も休まず、四人がゝりで働き續けたのは、僕生れて以來の経験であつた、

一日過ぎ二日と經つて行く間に、新聞の評判も漸く名高くなつて、新讀者は毎日百名以上申込が來ると曰ふ調子で、一ヶ月と半たゞざる中に、已にシカゴ市以外のみに一萬七千の讀者を有するに至り、資本家新聞以外、一個の勢力を存するに至たのは、實に近來の快事である、この一兩日以來、アツピール合併讀者……アツピール社は我日本を助けんとて、一弗にてアツピール一ヶ年分及我日本六ヶ月分合併購讀の發表をして呉れたのである……申込のみにても二百人位宛は這入て來る、先づ盛なりと謂可しである、

勿論今日に於ては、まだ印刷所は自分のではなく、他に依頼して印刷しつゝあるが已に印刷機械購入の相談も成り、數週を出すして「日刊シカゴンシヤリスト」は全く自由にして獨立せる、堂々たる新聞社となるのである、吾等、社員一同勉強して來十二ヶ月間に三百万の讀者を得るとに努力するの決心である、アツピールは已に三百万の讀者を有し世界一の社會主義週刊である、今日アツピール新聞の編輯長ツワローン君よりの來書に曰く「吾等は出來る丈け日刊の爲に盡力する、何となればシカゴは米國中で先づ我黨の日刊を出す可き地である、又持つて居なければならぬ市である」と、見るべし米國社會黨の近時の誇は、慥に此吾人が日刊ンシヤリストである、

一文なしで發行しはじめ、一ヶ月半ならずして二萬に近き讀者を作り、言はんと欲する所を明白に、自由に言ひ得る獨立にして大膽なる我日刊の短い歴史は是丈である。



再版發行

久津見藤村著

# 無政府主義

(定價金五拾錢)

平民書房發行

明治四十年五月二十二日印刷  
明治四十年五月二十五日發行

定價金四拾錢

(郵稅四錢)

不許  
複製

發行所  
特約店

東京市本郷區弓町貳丁目壹番地  
東京堂  
上田屋  
平民書房  
東海堂(大坂)杉本書店  
中庸堂(久留米)菊竹書店

編輯人兼  
東京市本郷區弓町壹丁目二十六番地  
熊谷千代三郎

印刷人  
東京市四谷區傳馬町叁丁目廿四番地  
田中卯之助

印刷所  
東京市四谷區傳馬町叁丁目廿四番地  
田中活版所



終